

中国語運用能力向上を目的とした初・中級 テキスト本文に関する一提言

大 森 信 徳

筆者は早稲田大学法学部で中国語教育に従事し今年で5年目を迎える。いかにすれば学習者により効率よく中国語を習得させることができるか悩みながら、瞬く間に月日が流れてしまった。これまでの総括として本稿ではとくに中国語運用能力向上に焦点を当てて、いささかの考察を加えたいと思う。

テーマとして運用能力を取り上げる一つの理由は、中国語によるコミュニケーションの必要性が近年とみに高まっているからである。日本企業の中国進出はもちろんのこと、日本国内への中国資本の流入や観光客の増加など、ビジネスにおける両国の関わりがいっそう親密化している。また、昨今「国際漢語」「全球漢語」の語が聞かれるようになり、中国の飛躍的な経済発展とともに、中国語のグローバル化も軌道に乗りつつあることがここにもよく示されている。

なお、筆者は中国語教授法を専門としていないため誤りもあろうかと思われるが、諸先達の指摘及び叱責を賜ることができれば幸甚である。

外国語と言え、まずその国際的需要度から英語が取り上げられることが多いが、日本人は「読み・書き」はできるが「話せない」などと、その真偽はともかくも、英語運用能力の低さが久しく喧伝されてきた。これに関して、中国のニュースサイト「人民網⁽¹⁾」2015年2月10日掲載の記事には、義務教育（注：高等学校を義務教育に含めている）、大学を併せて計8年もの期間、英語学習に心血を注ぎながら、日本人の英会話力が依然低いと論じている。その主な理由として次の2点を挙げている。

- 1 島国という環境が障害となっている。
- 2 恥ずかしがり屋で間違いを恐れ、積極的に話をしたことが最大の要因である。

この「日本人」という漠然とした対象の捉え方にも引っ掛かるが、この2点を次のように別の視点から捉え直すこともできよう。

- 1 内在的な動機付けに欠ける（あえて海外に行かずとも国内で一定水準の生活が保たれている）。
- 2 日本人の国民性として勤勉で細部に拘るゆえに、なかなか大胆に行動できない。

筆者が92年～96年の間、北京大学中文系に在籍して学んでいた頃、日本人以外の留学生（欧米、アジア、中東など）が相対的に饒舌でコミュニケーション力に長けており、それに比して日本人留学生が大人しく、あまり自分からは話をしない印象を確かに受けた。

中国人学生について言えば、外国語学習に非常に熱心であったように思われる。渡米留学を志していたのであろうが、学生のなかにはTOEFL対策用と思しき参考書の類を、英語と全く関係のない授業に持ち込んで内職している者も見かけた。また、キャンパス内にある未名湖の湖畔では、散歩や健康体操をする人々に交じり、朝早くから外国語の教科書を片手に歩きながら朗読に励む学生の姿が非常に印象的であった。

外国語による運用を苦手とするのは、かかる国民性や地政学的要素のほか、中国語の場合には語学に対する取り組み方および教科書自体にも要因があるのではないかと思うに至った。

本学部に着任後の一年余りは、学生の学習状況についてよく把握していなかったこともあり、前任校での教学方法を踏襲していた部分も少なくなかった。例えば、入門の段階より学生に中国語に対して興味を持たせるためにビデオ教材、言葉遊び、歌など娯楽的要素を授業に多く盛り込んでいたが、結局のところ時間を浪費するばかりで、はかばかしい効果は見られなかった。

本学部生の潜在能力を引き出すためには、むしろ半ば強制的に暗唱させたほうが有効ではないかと考え、入門より発音の基礎を一通り学習し終えた段階で、朗読と暗唱の課題を与えることに方向転換させた。未習コース一年修了時には、少なからぬ履修者が日本中国語検定協会の実施する中国語検定試験や中国政府公認の HSK（漢語水平考試）といった資格試験に挑戦して、各自の到達度に応じたレベルの公的な認定を受けていた。実益に繋がる可能性を示すことが、彼らにとって中国語を学ぶ強い動機づけとなっているようである。

個人的教学経験に則せば、暗唱を愚直なまでに忍耐強く仕上げた学生は、「話す」ことのみならず、「聞く」「読む」「書く」といった他の技能も、それに相応して向上していったことを実感している。

中国語学研究者の荒川清秀氏も、『体験的中国語の学び方—わたしと中国語・中国とのかかわり』（同学社）106頁において「まず中国語をたくさん頭の中にインプットしなければならない。インプットとはすなわち、テキスト、短文の暗記、暗唱である。暗唱のためにはくりかえし朗読することが必要である」と指摘している。

考えれば、暗唱が外国語学習に有効なアプローチであることは、目新しいものでもなく、ごく普通に従来から言われてきたことである。思い起こせば、私の通っていた中学の英語の授業では、毎回始めに10分ほどの時間を使い暗唱テストが行われていた。

しかし、この方法も時代の移り変わりや教授法の発展とともに手を変え品を変え、—いずれの方法も結局は暗記する行為を抜きにしては、言語の習得にはたどりつかないであろうが—正面切った「暗唱」は、そのストイックな響きゆえか、近年では影を潜めた感がある。

ただし一口に暗唱と言っても、いかなる到達点をもって十分に暗唱できたと判断するか、その習熟度の見極めについては別に論じるべき課題とする。例えば、全文が隈なく言えたとしても口調が訥々としている場合や、流暢で

あっても殆ど棒読みに近い発話であり、自然なイントネーションとは程遠い場合などである。音声的側面については本稿では立ち入らず、主として中国語運用能力を養成するために、テキストの本文が如何にあるべきかを、問題点の指摘とその解決に向けて以下に私見を述べたいと思う。

なお、拙稿で取り上げた用例は、この4年間に初級未習クラスで使用した教科書のものである。いずれも中国語学・教授法を専門とする先生方の苦心の末に上梓されたものであり、裨益するところが大きかった。また、その大半は総合的中国語学習を意図して編纂されたものであり、けして運用能力にのみ特化したものではなく、あくまでも筆者が拙稿の主旨に基づき引用したことを断っておく。

A 文法の運用に関する具体例

文法と一口に言っても文章を正確に読むための工具として理解しているレベルとそれを実際のコミュニケーションの場で能動的に使いこなせるレベルとでは雲泥の開きがある。本節では、授業を通じて学習者が習得しにくい文法項目について、運用という視点からいくつか具体例を取り上げてコメントを加えたい。外国人が効率良く外国語を学ぶためには、文法を学ぶことは避けられないが、詳細にして多くの文法項目を詰め込みすぎるのではなく、各文法事項の核となる考え方を、なるべくシンプルな形で提示し学ばせ身に沁み込ませる必要があるのではないだろうか。

なお以下の記述において、学習時間が200～300時間程度で、一般大学の第二外国語における第二年度履修程度が認定基準となっている中国語検定3級レベルまでに扱う事項を「初中級」と想定している⁽²⁾。

1 「是…的」構文

- 1-1 今天我从关西国际机场坐飞机来到上海。我是晚上六点半到的酒店。(『楽しく読める中国語』9課)

「是…的」は、すでに実現済みの事柄について、その時間・場所・方式・主体を重点的に説明する時に使う表現である。目的語がある場合には、初学者にはまず基本型として「的」をその後に置くように教えるが、この課が初出であるにも関わらず、いきなり変化球的用法である「V 的 O」の語順で登場している。実際の話し言葉ではこの用法が普通であるが、授業では、「我是晚上六点半到酒店的」を説明した上で、テキスト本文の表現はその一つのバリエーションであることを教えるようにしている。

また、「～のです」という日本語表現と対照させて理解させることが多いが、この用例に当てはめると、「今日私は関西国際空港から飛行機で上海にやって来ました。私は夜六時半にホテルに着いたのです」となり、不自然な感じを覚えるのは私一人であろうか。次の用例についても同様である。

1-2 张华是早稻田大学的留学生。她是从中国大连来的。

教科書では「是…的」はふつう強調構文としてまず取り上げられるが、これらの用例の場合、前の文に対して関連する具体的な説明を添えているだけで、断定あるいは強調しようという意志がそれほど強く働いているのだろうか疑問に思う。

異なる言語で常に一対一の意味的対応を求めることには無理があり、たとえ近似する訳語表現を当てて公式化したとしても、いつでもどこでも使えるというような万能薬ではないのである。さらに、この構文については、ある程度の中国語の語感を身につけてからでないと使いこなすのは難しいのではないか。初中級段階では読解する際の知識として学んでおく必要はあるが、あえて自ら使う必要性はなく、以下のように淡々と叙述することで事足りるのではないかと考える。

1-1 今天我从关西国际机场坐飞机来到上海。我晚上六点半到酒店了。

1-2 张华是早稻田大学的留学生。她从中国大连来。

2 否定辞「不」

否定辞「不」は原則として介詞フレーズの前に置くように教えるが、これも一筋縄ではゆかない。煩瑣を避けて教科書では意識的に明確に説明しないのではないかと推察されるが、不明瞭なままに済ませてゆくのは適切ではないと思われる。すべてを網羅することはできないまでも、ある程度の指針が必要とされる。

介詞フレーズの後ろに置く代表は、静態性の述語、つまり形容詞が述語になった場合である。

我家离大学不远。

我对看电影不感兴趣。

しかし、「一样」については、介詞フレーズの前後どちらに置いてもよい。

不跟我想象的一样

跟我想象的不一样

また、場所を示す介詞「在」を伴う介詞フレーズは、否定の焦点の違いによって意味にも違いが生まれる。

我不在食堂吃午饭。(他の所で食べても、食堂では昼食を食べない。)

我在食堂不吃午饭。(他の食事はしても、食堂で昼食は食べない。)

これらの単語は初級テキストのなかで比較的早く登場するものであり、また肯定形を否定形にし、否定形を肯定形にする練習は表現の基本中の基本でもあるため、煩瑣ではあるが、介詞フレーズの前に置く場合とそうでない場合を一度に提示し説明してしまったほうが良いと思われる。

これに関連して、使役構文「让(使)」も介詞というよりは動詞というべき語であるが、否定辞「不」は原則として「让(使)」の前に置く。しかしながら、次の用例はそれに外れるものである。

2-1 现在湖已经修复, 建筑当作遗址保存, 为了使人们不忘记历史。

(『話す中国語2』20課まとめ)

2-2 家长、老师的教导让考生不敢有丝毫放松。(『中文 Jump!』3課)

これらの用例が非原則的であることによる学習者の混乱を避けるために、ニュアンスの違いが生まれるが、次のように書き換えたほうが良いと思われる。なお、2-1 介詞「为了」を伴うフレーズは倒置させず、文頭に移動させた。2-2 は書き言葉的な表現を話し言葉に換えてみた。

2-1 为了不「让／使」人们忘记历史，现在湖已经修复，建筑当作遗址保存。

2-2 家长和老师的教导一点儿也不能让考生放松（心情）。

3 動態助詞・語気助詞「了」

3-1 今天为了买礼品，我和小李去了南京路。（『楽しく読める中国語』12課）

目的語が限定語を持たない場合、文末助詞「了」が動作の完了・実現を表す役割を担うのが原則であるが、この例文では述語動詞「去」が従える目的語が限定語を持たない単純な一語（「南京路」）であるにも関わらずそうなっていない。初中級の段階では「今天为了买礼品，我和小李去南京路了」としたほうがよいであろう。

これについて、榎本英雄氏の解釈を借りれば、「文の未終了効果を逆に利用した表現であり、文末助詞によって終了した文と比べて意味に具体的な差はないが、ある種の余韻を付加する表現手法である」と考えられる⁽³⁾。

或いは、本文において「我在那儿给父母买了一瓶白酒和几盒茶叶」の一文が後続することを考えれば、用例が句点で文を一応は完結させていても、意味的には次の文に係っているからであるとする解釈も成り立ち得よう。

同書において、かかる非原則的用例が13課にも2例見られる。

我用伊妹儿把这些照片发给了麦克。

麦克一收到照片，就给我回了邮件。

また次は現在の状況・状態を表している用例であり、ふつう初中級文法では扱わないものである。

3-1 我家养了一只狗。

3-2 堵车、汽车尾气污染成了很严重的城市问题。(『中文 Jump!』12課)

動態助詞「了」は必ずしも過去の時点において行われた動作・行為について表現するときだけに用いられるとは限らず、理解するに一筋縄ではいかない。英語の時制に慣れてきた学生にとって、ただでさえ「了」の原則的用法に慣れるのに容易でないうえに、上記のような用例も混在することになれば、なおさら混乱するのは必定である。よって、3-1は「我家有一只狗」、3-2は「堵车、(汽车) 尾气污染成为很严重的城市问题」と書き改めることでそれを回避すればよいのではないだろうか。

4 可能を表す助動詞「能／可以／会」

中国語には可能を現わす助動詞は、「能」「可以」「会」の三つがある。このなかで「会」は、技術の習得による可能、つまり「習い覚えてできる」場合に使われるので、他と紛れることはあまりない。しかし、次の表に示したように「能」と「可以」は用法上重なる部分も多く、教場で詳しく説明し始めると非常に面倒なことになり、学生に捉えどころのない印象を与えてしまうことになる。なお、次の表は荒川清秀『一歩進んだ中国語文法』(大修館書店) 179頁を参照した。

	能	可以	会
a 能力があってできる	◎	○	×
b 条件があってできる	○	◎	×
c 許可されてできる	○	◎	×
d 習得してできる	×	×	◎

三瀨正道氏は『MM 式中国語ドリルブック』(朝日出版) 68頁において、上記と同様の表を掲げ、「能」の用法は大変幅広くなっているの、時と場合によってけっこう使いわけがあるので、慣れるまではなるべく◎を使うようくせをつけましょう」と初学者の便宜を考えアドバイスを加えている⁽⁴⁾。

私自身は、非常にすっきりとした遠藤光暁氏の解説に従い（『話す中国語1』教授用資料 朝日出版社）、一般的に「できる」という意味においては「能」を、状況が許すことのできる、あるいは差し支えないという意味においては「可以」を使用するように説明している。

もちろんこれさえ覚えていれば何にでも適応できるというものではない。新しい文法事項を教えて、習熟のためにそれらを使って自由にセンテンスを作らせた場合、教員側が示した文法的枠組みに当てはまらない想定外の表現が示されるケースが少なくない。また、運用能力を鍛える語句の置き換え練習であっても、制約を加えているとはいえ、動詞及びそれに関わる目的語の性質によって使用できる助動詞も異なってくる場合があり、習得がそれほど容易ではないことを念頭に置く必要があろう。

例えば、

我会游泳

我能游二百米。

他会写汉字。

他会说中文。

他能看中文报。

他能听中文广播。

「泳げる」という技能に関わることであったとしても、具体的な距離が示されるか否かで表現が異なってくる。また、外国語が話せるのは「会」で、放送を聞いたり読んだりするのは「能」の守備範囲となる。「読む、聞く、話す、書く」の基本的な言語活動能力に何故このような捉え方の差があるのか、これまで釈然としないでいたが、試みに結果補語「懂」を付加した場合、「看」「听」についてのみ文が成立することを考えれば、「理解できる」という能力に関わっているか否かがその分岐点であるように思われる。

そのほか、「～して頂けるかどうか」という丁寧に相手に物事を依頼する場合の表現にも「能」を使う。

您能告诉我您的联系电话吗？（『走進中国』10課）

你能帮我看看吗？（『走進中国』10課）

麻烦你，能不能给我摁一下？（『話す中国語2』4課）

英語にも「Can you～」「Could you～」といったほぼ対応する表現があり、使い易いのではないかと考えていたが、実際の会話の場面において、即座にこの文型を想起できる学生はそれほど多くはなかった。これは状況からの判断による可能性とも捉えられるが、上記の基本的な表現とは別に項目を立てて理解させるほうが実際に運用しやすいであろう。

一口に助動詞といっても表現において複雑な振る舞いをし奥の深さを感じる。現在のところ、上記した助動詞一覧をまず習得させ、それ以外の用法については適宜個別に扱うしかないように思う。さらに、これは可能補語とも関連し、意味および使い方の差異など如何に学生に腑に落ちる理解をさせ運用へと導けるか大きな関門が控えている。

また、初中級の教科書で扱うオーソドックスな文法から外れるものに関して、逐一詳細に説明を加えるよりも、他の言い回しに替えるなどして暫時触れないようにすることも、学習者に系統的な理解を促すうえで有効となろう。

5 使役構文「叫（让）」

命令文の間接語法が「叫（让）」の使役構文によって表わされることがよくあるが、用例がこれに該当するにも関わらず、教科書によっては使役用法の説明に止まるものがある。例えば、

老师叫我们去写生，你跟我去吗？（『話す中国語2』16課）

著者はまず使役構文を学ばせるために、「叫（让）」を新しい文法事項としてこの課で初めて登場させているが、この用例はそれのみならず、命令文の間接語法とも捉えられる。日本語に訳した場合に文脈上不自然な印象を受ける場合も多くあるため、やはり補足説明すべきであろう。『楽しく読める中国語』11課に見える「小李让我用汉语点了各种点心」は、文法解説の項目で使

役用法とともに命令文の間接話法であることを示す訳語を併記している。

因みに、中国で出版されている教科書『走進中国』の本文ではこの命令の間接話法による用例が散見している。

服务员让大卫别着急。(3課)

李老师让大卫去医院看大夫。(4課)

王小明让大卫第二天去湖边找他。(5課)

しかしながら、初級段階ではなかなか馴染めない用法でもあるので、「告诉」「说」等の動詞で代用するのによいと考える。

本節では5つの文法事項に関して用例を挙げるに止めたが、ほかにも初級学習者の疑問を生み易い、あるいはつまずき易い点に関して黙殺するか、十分に説明していない所が本稿で取り上げた教科書のなかに見られた。これらの点については、チャート化或は公式化するなどして分かりやすい形で大まかな見取り図を示すことが先決である。その上で、荒削りであった部分を少しずつ削ぎ落とし、よりきめ細やかな形へと整えていけばよいであろう。また、ここに紹介しきれなかった文法事項については、別稿を用意し改めて考察を加えたい。

B 教科書本文の文体及び内容構成

言うまでもなく外国人が効率的に外国語を表現するためには、文法を学ぶことは避けられない。しかし、文法が正しいだけでは十分ではなく、単語一つ一つの背景にあるニュアンス、文全体の調子、論理的整合性など注意すべき点は際限がない。それを克服するためには、規範となる良い文章を暗唱することがやはり一番の捷徑であると考えている。

暗唱を通じて表現・語彙の蓄積がある程度できてからは、能動的に話すことの準備段階として文章を書くという課題を与えることも、結果的には外国語運用能力の向上へと繋がる有効な方法となり得ると考える。この意味において、初中級の作文は書き言葉による言語表現の習得を目指すというよりは、

むしろ話し言葉習得のための表現練習と考えるべきである。

手続きの知識がまだ十分に備わっていない段階にある場合、中国語で自由に話す時間を与えても、口頭で瞬時に表現できず、沈黙の時間が無駄に過ぎてゆくことになる。一方書く作業となれば、語句や表現を思い出したり、不確かな部分を教科書で再度確認したり、文全体の論理的運びを修正したりするなど時間的余裕ができ、よく理解し記憶されていなかった部分の気づきの場にもなり得る。その際には、日本語を介在させる日文中訳や中文日訳ではなく、テーマを与えて、それについて自由に作文することを旨としている。ただし自由作文とは言いながらも、俗に「英作文」は「英借文」と言われる喩えのごとく、規範的な文章の暗唱を通じて表現の型を覚え、さらに覚えた表現を組み合わせるようにし、単語を置き換える以外はできる限りそのまま使うよう指導している。

このように制約を加える理由は、自由に作文させた場合には、同じ漢字文化圏であるという親近感あるいは甘えからか、無意識のうちに中国語が日本語とは異なる外国語であることを忘れ、日本語的発想に基づき日本語の漢字熟語で間に合わせて文章を作り何ら気にかけない学生も一定数見られるからである。またそれとは別に、正解が多数生まれる可能性があり、非ネイティブ教員にとっては最終的な正誤判断がしづらい部分が残ることも事実だからである。

暗唱を通じてしっかりした言語的土台を構築し自在に運用できるようにするためには、まずその手本となるべき教科書本文が多少人工的であり純粹培養されたものであったとしても、オーソドックスな初中級文法の枠組みの中で、中国語の根幹となる発想・表現・構成を理解習得し、学習者が安心して中国語の大海原に向かって航海できるような羅針盤となるべき教科書が必要である。

教科書本文の作成に際し注意すべき点について、一つには文法及び表現については重要度の高い項目は早い時期に扱い、習得に期間を要する項目は後

回しにするなどよく吟味し、学習事項の優先順位を決め、学習者が順を追って無理なく積み上げて行けるような工夫が必要である。

二つには、本文はまとまった内容を持つ文章になっていることが望まれ、会話文のみのものは薦められない（現在秋学期に筆者が使用している教科書『走進中国』は、各課にまず登場人物2名の対話文があり、その後ろにその内容を要約した文章が載せられている）。それは、中国語の論理的繋がりや文章の構成を学ぶためであり、もう一つは、新たな場面や話題に臆することなく、その場で臨機応変に自ら表現を作り出してゆく力をつけるためである。他人の執筆した台本通りに会話が進行することは実際の場面においてほとんどないと言ってよい。その筋書から外れれば、たちまち心理的な動揺が追い打ちをかけ、立ち竦むしかなくなってしまうであろう。

三つには本文が平易な文体で書かれていることである。基礎的な表現・語彙の習熟なしに無暗に複雑な表現を操ろうとすることは避けた方がよい。運用能力養成の観点からも、なるべく平易に表現する癖をつけることが、即座に発話できるようにする為の神経回路を作ることには有効であると考えられる。平易と言っても、即稚拙であるということにはならない。平易でありながらも内容が充実しているスピーチや文章は数多く存在している。また、違う角度から見れば、平易な表現を使うことは、コロケーション（「搭配」）能力を訓練し、単語どうしの組み合わせを学んで活用自在にすることに繋がり、最終的に手続き的知識に結びつけてゆくためにも重要な視点ではないかと考える。

とくに中国語では中級レベルの教科書になると途端に講読の比重が増し、本文の書き言葉の要素が強くなる傾向にある。もちろん学識教養を示すためにも書き言葉やそれに準ずる表現、成語を覚え使うことは大いに推奨されるが、現実には長い学習歴を持つ者でない限り、文章全体の調子を統一することの難しさや、成語を適切な文脈で使用する事の難しさが付いて回ることになる。それ故に、中級レベルでも内容の質は落とさずに、平易な文章で書

かれたスピーキング用テキストがあってもよいのではないかと思う。この視点に基づく応用的作業として、中級レベルでは書き言葉と話し言葉の違いを明確にし、原文のニュアンスから多少離れる場合はあっても、書き言葉による文章を自分なりの平易な表現に書き直す練習をしてみるのもよいだろう。

『中文 Jump!』本文による参考例（AをBに書き換えた。）

2 課

A 父亲在一家贸易公司工作，每天早出晚归。

B 父亲在一家贸易公司工作，每天很早出门，很晚才回来。

4 課

A 每个人的兴趣各不相同。

B 每个人的兴趣各不一样。

8 課

A 近年来，手机技术日新月异地进步。

B 近年来，手机技术进步得非常快。

A 有了手机，方便得多。随时随地都可以用。

B 有了手机，非常方便。无论什么时间、什么地点都可以用。

もちろん言語を学ぶうえでネイティブの表現を目指すのが理想ではあるが、とくに大学に入学してから学び始め、しかも第二外国語として履修するような、それに割く学習時間が非常に限られる場合には現実的な話ではないだろう。

これに関連して、非ネイティブの優れた話者が如何に話すかを仔細に観察することも、得るところが大きいのではないかとと思われる。例えば、中国のテレビ番組『外国人在中国』は、外国人が中国で異文化摩擦を乗り越えながら生活してゆく様子を描いた30分間のドキュメンタリーである⁽⁵⁾。試みに「洋媳妇（之二）浪漫小屋」の放送回を視聴すると、中国人の男性弁護士と結

婚して3年になるロシア人女性の中国語の上手さに驚かされる。その番組のなかで書き言葉的な表現としては、ナレーションに「顺其自然」「坚持己見」が使われているぐらいのものであり、初級から中級レベルにかけて学習する平易な中国語の表現・語彙を上手く活用すれば、日常的な意思疎通が十分に果たせられていることがよく分かる。

現在、中国語教材は時代の需要に応え数多く出版されて、内容・構成においても様々な工夫が凝らされている。そうとは言え、筆者自身は版を重ねて長年親しまれてきた北京語言学院編『實用漢語課本』が、今のところ運用能力向上のための教材として最も優れていると感じている⁽⁶⁾。本書は1981年に編纂された外国人が中国語を学ぶために作成された初級教材であり、文法事項が無理なく段階を追って配列され、日常よく使用する無駄のない表現によって本文が構成されていて範とすべき教科書である。また余談ながら、補充教材としてその一部を授業で使用した際に、文中のレトロ感漂うイラスト、中国語の教科書でありながらパランカとクーパーという名の西洋人が主人公であるところが学生にとって面白みや親しみを感じたようである。ただし、場面設定が時代に合わなくなった部分もあることや、今では使われなくなった語彙もあり、個人的には新訂版の登場が切に望まれる。

以上より、効率的なスピーキング力向上には、平易な表現の習得が欠かせないことを述べてきたが、これは初中級の学習過程における限定付きの弥縫策と言ってもよい。意志疎通にある程度の自信が持てる段階に至れば、自然に自らの文脈に応じて、覚えた表現を変形させようという欲求が生まれ、能動的コミュニケーションへと発展してゆくはずである。この段階に到達して初めて、より気の利いた表現や格調高い表現、よりネイティブらしい表現へと移行してゆけばよいと考える。

最後に付言しておきたいのは、上述のごとく言語それ自体を如何に効率よく教えるかというテクニカルな研究も大切ではあるが、現場の状況を見ると学習・教育の過程において、心理的側面から学生を如何にサポートしてゆけ

るかについても正面から検討すべき課題になりつつあるように思う。

娯楽と情報に満ち足りた生活のなかで育った学生にとっては、内容自体が陳腐で無味乾燥なものでは、なかなか学習意欲が掻き立てられないことも実感している。副次的とはいえ、内容の如何が語学学習に与える影響も軽視できない。

そうとはいえ、どれだけ学習意欲を喚起させ得るような教材を提供したところで、表現や語彙を「理解した」状態から意識することなく脳裏から自在に「引き出せる」状態へと移行させるには、徹底的に反復学習をすることしかないのではないか。この過程は、いわば楽器、スポーツの練習の如く「忍耐」を抜きにしては考えられない。気楽に学んで習得できるものなら誰も苦労はしないのである。その苦しみを乗り越え自家薬籠中の物とした末に自ずと視界が開けてくるはずである。そこにたどり着くまでの試練を如何に指導してゆくのか、スポーツ、音楽など他の分野の指導理論も踏まえながら、いづれ稿を改めて検討してみたい。

注

- (1) 中国共産党中央委員会機関紙『人民日報』で知られる人民日報社が1998年12月に開設したニュースサイト。
- (2) 『人文論集』47（早稲田大学法学会・2008）「カリキュラム改革後の中国語」17頁において、門田康宏氏は中国語検定試験に言及し、「外国語学部や文学部以外の学生にとっては、一年修了時で4級、二年修了時では3級、三年時からはそれ以上が妥当な目標だと筆者は考える」と述べている。
- (3) 榎本英雄『榎本式 中国語リーディング』（アルク・2011）
- (4) 上記の表において、荒川氏の表記とは一部異なり所があり、「d 習得してできる」項目において、「能」「可以」とともに○の表示が記されているが、その具体的理由については分からない。ここでは荒川氏の見解に依った。
- (5) 中国中央電視台のテレビ番組。毎週土曜日13時から13時半まで放映されている。
- (6) 北京語言学院編『实用汉语课本』（商務印書館）第1巻・第2巻全50課（1981）の邦訳である『実用漢語課本』日本語版が1991年に東方書店より出版されている。

※本稿において本文を用例として多く使わせて頂いた教科書は次の通りです。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

- 董燕・遠藤光暁『理香と王麗 話す中国語（１、２）』（朝日出版・2010）
- 楊徳峰・王添森『走進中国』（北京大学出版社・2011）
- 人見豊・李研『中文 Jump! 随時随地』（金星堂・2012）
- 胡金定・吐山明月『楽しく読める中国語』（白帝社・2013）